

伊勢神宮崇敬会だより

みもすそ

特集 伊勢の
伝統木工芸

お伊勢さんの歳時記

- 1月1日 歳旦祭
- 1月3日 元始祭
- 1月7日 昭和天皇祭遙拝
- 1月8日 大暦奉製始祭
- 1月11日 一月十一日御饗
- 1月31日 大破
- 2月11日 建国記念祭
- 2月17~23日 祈年祭
- 2月23日 天長祭
- 3月5日 大暦頒布終了祭
- 3月20日 春季皇霊祭遙拝
- 3月20日 御園祭



内宮を流れる五十鈴川は、倭姫命が御裳を濯がれたことから「御裳濯川」(みもすがわ)とも雅称されます。題字は本会会長の松下正幸による浄書。表紙は、太田結衣さんの伊勢一刀彫による十二支作品より。

第93号
令和2年冬



彫り終わったら、彩色して「子」に命を吹き込む。(神宮えと守ではありません)



荒削りが終り、仕上げ彫りを待つ材。



右／おもな原木はクス。工房には芳香が漂う。太田さんは製材も自ら行う。
左／さまざまなノミや小刀を使い分けて彫っていく。工業製品のように形が揃っていないが、微妙に異なるのが手彫りの魅力。



■太田さんの一刀彫作品は、おかげ横丁や外宮参道のギャラリーショップ「金近」などに取扱あり。
<https://ittobori-yui.jp/>

「彫刻家として食べていける道を模索していた折に、神宮のえと守のことが頭に浮かびました。どこにも求人募集はな

のどかな里山を望む玉城町の一角。太田結衣さんの工房は、クスノキの芳香に包まれています。
伊勢に伝わる一刀彫は、神宮ご造営に従事する宮大工が余技として端材で縁起物を刻んだのが起源といわれています。特徴は、一度の刻みがそのまま仕上がりになるような豪放で直線的な造形。神宮で頒布される「えと守」をはじめ、「神鶏」「代参犬」など神宮にちなむモチーフが好まれてきました。

かっただけですが、郷里の知人から師匠を紹介していただき、一年間工房へ通わせていただきました」
伊勢一刀彫はクスが主材です。神宮えと守の場合は、神宮林から搬出された材を全国各地の職人さんたちがそれぞれの工房で彫ります。
丸太を角材にひき、直方体に切ってから刻みの作業に移ります。太田さんは自作の型紙を木に当てて、削る際のガイドを書き写します。
カッ、カッ、カッ……勢いのある刃音が工房に響きます。一刀彫は木目や刀痕を生かすのがみそ。大小さまざまなノミや彫刻刀を使って、全体は大胆に、顔や耳などは慎重に彫り進めていきます。
「仕上げますね」

太田さんは小筆を手にとると、彫り上

伊勢一刀彫をより多くの人に知ってもらいたいと、太田さんはオリジナルの小品も創作し、情報発信に努めています。
近年、妹弟子と弟弟子ができたことをうれしそうに語ってくれた太田さん。伊勢一刀彫の伝統のたすきは、次世代にきちんと受け継がれていきそうです。

「神宮えと守は毎年、一流の彫刻家がデザインしたもの、各地の職人が年末に向けて彫っていきます。子供が生まれたこともあって、今年は神宮のえと守は百五十体、全体では千八百体に減らさせていただきました」
伊勢一刀彫をより多くの人に知ってもらいたいと、太田さんはオリジナルの小品も創作し、情報発信に努めています。
近年、妹弟子と弟弟子ができたことをうれしそうに語ってくれた太田さん。伊勢一刀彫の伝統のたすきは、次世代にきちんと受け継がれていきそうです。



一刀彫、根付、玩具…
神宮と共に歴史を刻む伊勢のまちには御造営の払い下げ材をルーツとする工芸品や参宮土産に人気を博した民芸品が今も職人たちによって手作りされています。

特集 伊勢の伝統木工芸

干支の縁起物を彫る太田さん。白装束で作業に臨む。

宮大工の余技から生まれた
大胆なノミ使いが魅力

伊勢一刀彫

おた ゆい
太田結衣さん



木彫りの金魚鞆。こういった創作も手がける。

神具店に納める縁起物には彩色も。

豊かな自然と温暖な気候に恵まれた伊勢では、古くから神宮にゆかりある工芸品や民芸品が作られてきました。
とりわけ「木」を素材としたものが多く、宮大工がご造営の払い下げ材を使って始めたとされる伊勢一刀彫、朝熊山で採れる本黄楊を彫る伊勢根付、色鮮やかな伊勢玩具は、江戸時代から今日まで脈々と伝えられてきました。
今号では、伊勢近郊に工房を構える三名の職人をご紹介します。

「昔から根付は彫った分(時間)だけ磨け、
といわれます」
中川忠峰さんは、そう言って二つの根
付を持たせてくれました。一方は手の中
で肌に吸い付くよう。それに比べると、
他方はそこまで滑らかではありません。
彫りではなく、磨きの違いです。紙やす
りの番手を細かくしながら磨き込み、鹿
革で拭いて仕上げるのです。
根付は、和装が主だった江戸時代の留
め具。いわばキーホルダーです。かつて
は巾着や煙草入れを帯にはさみ、腰にぶ
ら下げた時に落ちないようにするのに活
用しました。着物や帯を傷つけないよう、
手触りのよいフォルムが求められたので
す。

朝熊黄楊を精緻に彫り、磨く
手のひらに載る小宇宙

伊勢根付

なかがわただみね
中川忠峰さん



年代物の機械ろくろに木材を固定させ、歯を当ててコマを削り出していく。



右/工房には伊勢近郊を中心に集められたヒメシャラの材が。左/材を固定する治具や刃物など道具はほとんどが自作。炭火を焚いて鍛冶屋さんのような仕事もする。

■伊勢玩具は神宮会館の売店で販売中。どんぐりごま 300円、ヨーヨー-500円など。

内宮前に工房を構える
伊勢唯一のくりもの職人

伊勢玩具

はたいかずや
畑井和也さん



畑井さんが現在手がける伊勢玩具は30種類ほど。くりものの技術を活かしたオリジナル作品(左)も生み出している。



だるま落とし、けん玉、こま、ヨーヨー。懐かしい木製玩具の数々は、内宮前の「畑井工房」が作っています。

明治初期から当地で続く伊勢玩具は、木を材とする「刳物」と、大鋸屑を固めて作る「練物」との総称。どちらも参宮土産として発展してきましたが、近年練物業者が廃業し、刳物を手がけるのも畑井和也さんのみとなってしまいました。

畑井さんは三代目。祖父が阿漕(三重県津市)の木地師から技術を習い、帰郷後に工房を構えました。

「私が家業に就いた三十数年前は、市内に五、六軒の同業がありました。昔は駄菓子屋で売るような量産品で、質が悪いのもあったんですが、県の伝統工芸品に指定されてから品質がどんどん向上しました」

材料は、当地でサルスベリと呼ぶヒメシャラが主です。昔から炭を焼くのに近隣の山に多く植えられていました。硬く緻密な材質で、発色が良いのが特徴。パッと目を引く赤、緑、紺のシンプルな色使いは、大人が見てもきれいです。子どもが遊ぶものなので、なめても大丈夫な塗料を重ね塗りして仕上げます。

「簡単そうに見えて、一本一本くせがちがいますから『木を見る目』がないとできない仕事です」

畑井さんは玩具の他、お盆や酒器、ときには家具の部品など、技術を頼みにされると柔軟に対応してきました。その信頼の積み重ねが、今日まで続けてこれられた秘訣でしょう。

参宮の歴史とともに発展してきた伊勢ならではの工芸品。令和二年の初詣記念に求められてはいかがでしょうか。

当初は簡素な造りで、伊勢参りの土産物として人気を博しましたが、時代が下るにつれ意匠を凝らした作品が作られるように。幕末から明治初期にかけて当地で名作を生み出した鈴木正直まことひらの頃より、根付は美術工芸品へと高められました。

伊勢根付の材料となるのは、伊勢志摩の山林に自生している「朝熊黄楊」。土壌が痩せていて気候も冷涼なため成長が遅く、それゆえに組成が密で硬く、木の宝石タカラと呼ばれます。

直径は約三〜四センチ。初心者は完璧な球体に削っていくのが修業の第一歩ですが、この道四十年を超える中川さんともなると造形の発想と技術力がずば抜けています。イカの背中に昆布を付けた「こぶじめ」。ウサギがカメにおぶさった「今度いまは仲良く」。サヤの中に豆が入ったエンドウなど、からくり仕掛けの作品もあり、いつまでも飽かず眺めてしまう掌上の小宇宙です。

「私は元々は大工でした。腰を痛めたので、座って仕事ができる仏師をめざそうと木彫に転じたのです」

地元の木彫会に入ってから根付を彫るようになった中川さんが、根付一本でいける自信を得たのは一九八七年。東京の百貨店で開催された根付展会場で、高円宮殿下に作品を求めていただいたのがきっかけといえます。以来、県内外で根付教室の講師をしながら後継者育成と業界の発展に尽くしてきました。

「地域によっては動物の牙や角、竹など



民話をモチーフにした作品。直径3cm程とは思えない。



根付の基礎が詰まっているとされる丸鼠の制作工程。

も使われますが、伊勢根付は地元産の朝熊黄楊だけ。今は山から木を出してくれる人がいないので、自分でリュックを背負って地域の持ち山へ入らせてもらいます。伐った分の倍は苗木を植えてくるんですよ」

資源を枯渇させない心配りも怠らない中川さん。工房はまちかど博物館として無料で公開もしています（要予約）。



ツゲの見本。トルコや鹿児島など温暖な地域では成長が早いが、朝熊では成長がゆっくりな分だけ組成が緻密になる。



多くの弟子を育ててきた中川さん。生き物好きで、その観察眼が創作の発想につながっている。

■中川さんの工房は、まちかど博物館「伊勢根付彫刻館」として予約制で見学できる。展示作品の購入可。オーダーも受け付ける。TEL.0596-25-5988